

P-109 Vibroacoustic Stimulation Test(VAST)  
の分娩時使用の有用性について

公立陶生病院

松原寛和, 中村衣江, 浅井英和, 中原靖典,  
石田昭太郎

【目的】分娩時の Fetal Heart Rate(FHR) monitoring において異常な徴候を認めた時、それが単なる“stress”によるものか、それとも“distress”が起こっているかを見分けるのは時に難しい問題である。今回我々は、active labor に Vibroacoustic Stimulation Test(VAST) を使用し、その有用性を検討した。【方法】1990年11月より1992年4月までの間で正期産、頭位分娩した142例を対象とした。VASTはコロメトリックス社の146音・振動刺激装置(75Hz, 74dB)を用い、陣痛間歇時、FHRがbaselineに回復後、母体腹壁の胎児頭部周辺に3秒間刺激を行った。反応は15bpm以上、15秒以上のacceleration出現にて陽性とし、反応陰性の時は更に1分以上の間隔をあけて、最高3回まで刺激を行った。VASTは胎児娩出まで繰り返し行い、最後のVASTが胎児娩出前15分以内である症例を分析対象とした。胎児娩出後、直ちに臍帯動脈血ガス分析を行った。なお胎児管理の方針はVAST反応結果を考慮せず、従来の基準を用いて決定した。【成績】最後のVASTより胎児娩出までの時間は1-15分で、平均5分であった。142例中120例でVAST反応陽性を示し、全例にて臍帯動脈血PH>7.20であった。22例はVAST反応陰性で、その中で10例は臍帯動脈血PH≤7.20, 残る12例はVAST反応陰性にもかかわらずPH>7.20であった。【結論】分娩中にFHR monitoringにて異常な徴候を認めても、VASTを繰り返し用い反応が陽性である限り、不必要な介入をすることなくそのまま経過を見ることができると考えられる。

P-110 経腔超音波検査による胎児発育と胎児心拍数の変化等についての検討

大阪・小阪産病院

赤岩 明, 平岡仁司, 竹村礼子, 竹村秀雄

【目的】経腔超音波検査による妊娠早期(特に胎芽期)での胎児予後診断を目的として、正常発育例における検討を行った。【方法】平成4年5月より8月まで当院外来を受診し、その後妊娠5ヵ月まで胎児が正常発育した妊婦122例を対象とし、CRLが30mm以下の観察のべ187回を検討した。使用装置は持田SONOVISTA-if経腔メカニカルセクタ(5MHz, 7.5MHz)または、東芝SSA-260A経腔コンベックスセクタ(5MHz)プロープである。観察はCRL、FHR、GS径、卵黄囊径、臍帯血流の有無等について行った。距離計測は装置上のキャリパーで行い、FHRはPanasonicM2ビデオレコーダーAU-650での1分間M-mode連続記録から心拍数を計測しその中の数拍から算出した心拍数の有用性を検討したのち応用した。【成績】FHRは通常の2心拍計測では変動係数4.6%、連続8心拍では変動係数1.6%であった。妊娠初期のFHR計測はM-mode上に連続8心拍の計測ができれば臨床上有用であった。連続8心拍が計測できた最小CRLは1.8mmであった。最小記録心拍数は84bpmであった。CRLが20mm以下ではFHR(bpm)=95.49+4.17×CRL(mm). (r=0.92)と直線的な増加を示し、同一症例においてはこの間でのFHRの減少はみられなかった。GS径20mm、CRL3mm以上で全例に胎児心拍を計測できた。CRLと卵黄囊径の比は5mmで逆転し経過と共に増大した。CRL20mm以上では全例において経腔カラードプラ法により臍帯血流が確認された。【結論】FHRの増加が終了するCRL20mmの時点で、胎児心拍数160bpm以上、臍帯血流確認の所見がそろえば胎芽期の完成と思われ、予後はほぼ良好と診断できる。